美唄
Bibai

白いダイヤでマチ再生を

人と雪の共生をテーマにした「第５回全国明るい雪自治体会議・雪サミット2002インびばい」（美唄市主催）が７月６日・７日美唄市民会館などで開幕された。豪雪地帯に住む人にとって「お荷物」だった雪が，雪冷房など新しい資源として生れ変わろうとしています。97年から「美唄自然エネルギー研究会」を発足した同会ではサミットの意義と雪の持つ可能性について協議されてきた。98年空知郡沼田町で開かれた第１回からこれまですべて参加して来たが，市部での開催は初めて。新潟県や岩手県などで開かれたサミットは，５千から７千の人口の町に約５百人程度を集めるイベントとして毎回，かなりの熱気だったという。

今回は道内外29自治体の首長らが出席しているという。各地の雪冷房施設の事前発表も数多くあり，美唄では農協が手がけた玄米貯蔵施設や農産物を冷やす研究施設もあり，それなら人間を冷やしてもという意見も出て，どんどん発想がふくらんだ結果，市内に雪冷房を導入した賃貸マンションや老人保健施設なども誕生した。よくぞここまでの感は深い。折角雪があるのだから利用しなければと市民皆が思うようになればサミットの意義は大きい。これまでの活動で雪室（ゆきむろ）の冷気を直接送る全空気方式と熱交換する冷水循環式の確立など技術的な面では，ひとつのステップをクリアしたごとく思われるが，総合的に雪と付合っていく知恵は充分とまでは至っていない。利雪はいいが親雪はまだまだという段階かも？冬にどうやって雪を楽しみ，産業や暮らしの中で雪を考えていくか具体的施策は，これからといえる。黒いダイヤで

栄えた旧産炭地の美唄が今度は白いダイヤで新しい雪国の生活を実現させていくことが，果してできるであろうか？悲願である。白い恋人よ!!

（雨田　実記）